

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

論題(和文)	音声対話ディスコースにおけるパラフレーズとコヒージョンの分析とその形式化の研究 -セミナー対話の理解過程の分析- (共著)
Title(English)	Research on Paraphrases and Cohesion in Dialogues -Analysis of Understand Process at Seminars
著者(和文)	仁科喜久子, 笹川洋子, 土井みつる
Authors(English)	KIKUKO NISHINA
出典(和文)	文部省科学研究費補助金重点領域「音声・対話・概念の対話理解と生成に関する研究」研究成果報告書, Vol. , No. , pp. 91-98
Citation(English)	Research on Understanding and Generating Dialogue by Integrated Processing of Speech, Language, Concept Report of Grant-in-Aid for Scientific Research by Ministry of Education, Science and Culture, Vol. , No. , pp. 91-98
発行日 / Pub. date	1996,

[A 班公募研究]

音声対話ディスコースにおけるパラフレーズと  
コヒージョンの分析とその形式化の研究  
セミナー対話の理解過程の分析

仁科喜久子

(研究協力者; 笹川洋子・土井みつる)

東京工業大学留学生センター

1 はじめに

本年度は、最終年度のまとめとして、セミナーの収録データに更に3本のデータを加えた。また分析は前回までは、特にパラフレーズに注目して行ったが、今回はそのまとめとして、セミナーの流れ全体を見ることに重点をおいた。そこで次のような分析を行った。

相互理解に至る要素としての言語表現と知識との関係を対照し、分析した。

対話中の発話がどのような機能を担っているかを観察し、それぞれの発話にラベル付けをし、セミナーでの発話機能の分類整理をした。

それぞれの発話にみられるディスコース・マーカーを観察することで発話意図を見いだす、その曖昧性を解消する可能性を検討した。

2 収録データ

昨年度までに東京工業大学大学院理工学研究科セミナービデオ収録し(60分×16回分)、そのうち10資料分の書き起こしを完成した。本年度さらに次の資料をビデオ収録し、書き起こしをした。

資料17 電気電子工学科 N 研究室 A Robust Synthesis Method for Speed-independent Circuits from Signal Transition Graph Specifications 発表者 S.P 韓国人 博士課程2年生 年齢30才 録音時間90分 収録日時1995年7月9日

資料18 電気電子工学科 N 研究室 依存性グラフと回路の間における中間表現 発表者 R.M ブラジ

ル人(日系3世) 修士課程2年生 年齢25才 収録時間60分 収録日 1995年7月16日

資料19 電気電子工学科 N 研究室 論理式によるパルス駆動型非同期式論理回路の基本素子の組み合わせ回路構成法 発表者 A.k 日本人 修士課程2年生 年齢25才 収録時間60分 収録日 1995年7月16日

資料20 制御工学 M 研究室 輪講 LQC 最適制御システム 発表者 P.B ブラジル人 修士1年生 年齢24才 収録日1995年6月5日

3 分析の方法

3.1 対話の定義

ある時間内( $t_1 \rightarrow t_x$ )で二人以上の話し手と聞き手が行う言語行為では、論理的あるいは心理的な面から見て言語表現の場つまりテキスト内( $w_1$ )で結束性(cohesion)を持っている。これは知識の場( $w_0$ )としての coherence (結束構造)を背景に持つものである。

3.2 セミナー対話の目的と理解過程

セミナーでの対話の目的は二人以上の対話者間で学問上の問題を理解し、新しい真理を得るべく情報を交換しながら相互理解にいたることである。新聞などの報道ニュースや社交的な世間話などの対話でも外界に起こっている未知の事柄に関する情報を獲得するという目的があり、新情報獲得という点では共通している。しかし報道ニュースではその社会

に属する構成員としての国民や市民が共有する知識があり、その既知概念の上に情報が伝達される。世間話の場合は対話間だけで通用する共有の既知情報の上で理解が成立することがある。セミナーの対話でも限られた学問世界でそこに属するメンバーには理解できる専門的知識を前提として理解が成立することになる。

## 4 理解にいたらない対話

### 4.1 理解に至らない理由

セミナーに参加して、お互いが満足できるような相互理解に至らない理由としては言語的な原因と背景知識の問題が聞き手側と話し手側の両者にあると考えられる。

#### ● 聞き手に問題がある場合

1. 物理的な障害などで聞き手に音声理解できないとき。(騒音・難聴)
2. 外国語などという理由で言語能力が不足で、聞き手がかりかきできないとき。(語彙知識、文法知識)
3. 情報・知識の不足から概念の理解ができない。
4. 推論能力がないために事柄の因果関係を理解できない。

#### ● 話し手に問題がある場合

1. 発声法(声が小さい、不正確な発音)が適当でないために起こる。
2. 言語能力の不足。(不適当な語句、構文)
3. 情報知識の不足から適切な語句を使えない。
4. 事柄の因果関係を説明するための方略がよくない。

このような場合に相互理解の障害が起こり、それを修復する言語的な方略が用いられることになる。その詳細は前年度の報告書で述べた。本報告では、専門知識はないが、聴力が健常で、平均的な日本人と思われる人(A.A.)の聞き取りと専門知識はあるが外国人で日本語能力は中級から上級の間と思われる外国人(S.P.)の聞き取りを比較し、知識と言語能力の要因がどう関係しているかをみた。

## 4.2 知識と言語理解

(原)がA.A.がはじめに書き起こしものである。

(新)はS.P.が校正し、さらに筆者が聞き直して手を加えたものである。(原)と(新)が異なるところが90箇所ある。そのうち45カ所は専門用語の外来語名詞がある。表1でその典型的な例を示す。このように誤りが多い理由としてはひとつはS.P.が外国人で、発音が正確でなく、標準的な日本語の発音とは違うために聞き取りが難しいということがある。しかし、P.S.の所属する研究室のメンバーは彼の発話を日本語として理解していると思われる。その理由は背景知識共有しているからであろう。

A.A.には「サーキットモデル」「インプリメンテーション」「フルロック」「センター」「リージョンネットワーク」という専門用語は未知語である。これらの語がある箇所の前後は誤りがさらに重なったり、空白になっている箇所が目立つ。これは人が相手の発話を理解するときには、聞き手の持っている背景知識を利用して推論を行うことで理解を助けているが、ここではその推論を利用することが阻まれている状況を示していると思われる。この例は一人の書き起こし手についてのものであるから、さらに精細なデータで検証する必要があるが、物理的には聞き取れない箇所も、様々な背景知識を利用して、相手の発話を理解しているという仮説が立てられる。

## 5 発話機能の分類

セミナーにおける発話では、相手を理解させたり、相手の発話の意図を知るために様々な方略を用いて、発話を行う。個々の発話がどのような機能を持ち、それがディスコースの流れの中でどのような役割を果たしているかを見るためにラベル付けを行った。ラベル付けを行うに当たっては中田(1991)や国立国語研究所(1994)などの発話機能の分類を参考にし、セミナーの発表者である外国人学生とそのメンバーが互いに対話による交渉の過程を通して共通理解に到達するという場面に現れるもののみを分析した。表1は分析対象とした資料の発話数と文数を示した。それぞれ発表者がもっとも発話数が多いのは当然であるが、資料19の教授の発話数の比率が他の2資料に比べてやや多く、他の学生の発話が少なくなることがわかる。このような発話者の発話数や発話者の分散の様相からそれぞれのセミナーの特徴

が見られる。資料19は教官と発表者に偏ったものであり、資料17,18は全体でのディスカッションが盛んであるというえる。

表2 発話数

	合計	P	S	R	M	A	K	N	教	U	助	他	文数
資料17	228	109	1	0	50	28	80	377					
資料18	174	0	81	0	52	15	26	309					
資料19	87	0	0	39	35	6	7	116					
	489	109	82	39	137	49	113	802					

次の表3は書き起こし資料を分析した結果でた項目である。

表3 発話機能の分類

1. 発信・受信表示=発話者が相手の発話を受信したか、発信しようとするもの。
  - (a) 発信表示：今から発話をするを示す。
  - (b) + 受信表示：対話者の先行発話を理解し、受信したことを示す。  
きなかったことを示す。
  - (c) - 受信表示：先行発話を理解出来なかったことを示す。
  - (d) 保留要求：相手発話の内容理解などのために、発話継続の保留を要求する。
  - (e) 交話表示：相手との関係を作る。
  - (f) 注目要求：発話開始時に合図を出し、聞き手の注目を要求する。
2. 情報要求：新しい情報の提供、既知情報の確認、疑問の提示をすることで相手に情報を提供することを要求する。
  - (a) 疑問提示・応答要求・新情報の要求：現在の状況に納得が行かず新しい情報を要求する場合。相手に新しい情報を提供するように要求する。疑問に感じたことを相手側に示し、それからさらに正否・可否などをたづねることから新情報を求める要求まで段階的にある。
  - (b) 確認要求・同意要求：対話者に自分の知識や考えの確認を求める。相手の発話あるいは現在の状況が大体理解できるが、相手に確認を要求する。

- (c) 理解チェック：対話者の理解をチェックする。発話者は承知しているが相手が本当に理解しているかどうか不安でそれを確認する。

3. 情報提供：新情報を含む。特に、意味の交渉の過程にはパラフレ-ズ・例示・コードスイッチング・反復など様々な形式で現れ、その出現形は発表者が持つ専門的知識や日本語能力に関連する。

- (a) 情報要求に対する応答：上の項目2.の(a)に対する応答。
- (b) 確認要求に対する応答：同じく2.の(b)に対する応答。
- (c) 事柄の説明：空間の様相・時間の経緯などの説明・事柄の因果関係の説明。
- (d) 心情・態度表明：発話者の思いや態度を表明する。
- (e) 意見表示：発話者の考えを示す。
- (f) 説得：相手に自説の正当性を説明しながら、理解させようとする。
- (g) 主張：自説の正当性を示す。
- (h) 行為・行動指示：発話相手に対して、行為を指示する。

表4 発話機能の出現様相

	資料17	資料18	資料19	合計
受信・発信表示				
受信表示+	18	6	7	31
受信表示-	11	0	1	13
発信表示	10	2	4	16
肯定表示	15	0	6	21
否定表示	17	0	0	17
保留要求	1	0	0	1
情報要求				
確認要求	32	26	8	66
疑問提示	30	23	7	60
応答要求	6	3	3	12
同意要求	5	0	0	5
意見要求	2	2	0	4
情報提供				
事柄伝達	4	3	0	7

説明	60	31	23	114
意見表明	33	40	12	85
提案	0	6	0	6
主張	19	1	1	21
反論	10	2	0	12
相手意見訂正	2	0	0	2
説得	3	3	5	11
意向・意図	4	2	0	6
態度表明	3	3	4	10
	295	161	81	537

## 6 ディスコースマーカー

この発話機能の分析をするに当たって対話の流れを示すメタのマーカーとして次のようなものが見られた。

表5 セミナーのディスコースマーカー

1. 予告のマーカー=これから述べる発話の主旨を最初に示すことで情報伝達を容易にする。
  - 話しの進行に関する予告=「次はちょっとむずかしいですよ」
  - 理由述べ=「なぜかっていうと / 例えばですよ」
  - 発話内容に対する態度表明=「おもしろいのは / 残念ながら」
  - 発話内容の明確化=「言いたいことは、」
2. 確認のマーカー=聞き手の理解を確認しながら情報提示する際にも、確認を要求する際にも有効なマーカーである。「わかったかな。 / ～(わけ)ですよ。 / ～んです(よ)ね。 / ～てことですか。」
3. 譲歩主張のマーカー=相手の意見を尊重した上で、自分の主張を行うことは、討論においては丁寧さのルールに違反しないためにも重要である。「それはそうなんですけど。 / それはいいですけど。 / そういうふうにも考えられますね。」
4. 要約のマーカー=自分の発言を要約する場合と他者の発言を要約する場合がある。「要するに / つまり」

5. 言い替えのマーカー=自分の発言あるいは他者の発言を言い替える場合がある。「っていうか」
6. 言い訳のマーカー=討論場面では重要なマーカーである。「～いけないんですけど」
7. 保留要求のマーカー=理解が十分でできないとき対話の進行を止まるように要求することがある。「ちょっと待って」
8. 対話の流れを示すマーカー=話しの始まり終わりを示す。「以上で終わりにします。」

付録例1、例2が実際の発話資料でどのように用いられているかを示す。分析にあつては下記のようなスロット表を作り、発話機能とマーカーを書き入れた。ここでは筆者の判断で発話意図を考えながら、機能のラベルを付けた。つまり人間の判断で、発話意図を推測するために明確にその機能に当てはまる明示的に言語表現があるものと、非明示的なものがある。マーカーの箇所にある(+)は明示的、(-)は非明示的であることを示している。

## 7 セミナー資料の分析

### 7.1 受信・発信表示

#### 7.1.1 発信表示

N教1)の「えーと」はこれから発話を始めるという発信表示である。

従来言いよどみなどに分類されているものも発信のマーカーとみることができる。これによって聞き手はその発話者に注目することができる発話の方略ともいえよう。

#### 7.1.2 受信表示

(S.P2)の「はい」は相手の話を聞いているという受信表示のマーカーと考えられる。しかし(S.P3)、(S.P10)の「はい」「ええ」は、聞き手が確認要求をしているので、その発話内容に対して肯定をしているマーカーである。また(N7)は確認要求をしているが、(S.P8)では受信表示がなく、直接「わたしはそう考えています。」と答えている。

否定表示としては教官側から明示的表示として「ちがう」という発話が見られた。一方(S.P12)(S.P13)

で「あ」という発話がある。これは(S.P)が教授に対して遠慮がちな否定表示をしているものである。東洋人の場合は相手の発言を否定する場合は、このように目上の相手には気持ちを悪くしないような配慮をしながら表現することがしばしばみられる。

発信・受信表示の項目に入れた〈理解表示〉では明示的な肯定表現として「なるほど。」「あ、はいはい。」などが見られた。否定的で明示的なものとしては「ちょっと待って。」「わからない」、「え」というイントネーションがあがるものがある。

(S.P67)では「はい」と答えているが不審な音調で答えている。これについて後日のインタビューでは、教授から「スタンフォードのピーター」という語句を聞いたとき、スタンフォードという言葉からピーターはスタンフォードに関係のある人を指していることはわかったが、どういうスベルの人かわからなかったのもそれに該当する人物はこの対話中には浮かんでこなかったと述べている。これは「はい」といいながら理解出来ていない例である。

このように分からなくてもとりあえず「はい」と答えてしまう場合が特に外国人学生の場合はしばしばある。その場で迷惑をかけてたくないという配慮からきている交和表示に近いものである。このように受信表示で表現としては同じでも、そこに含まれる意図は非常に多様であることがわかる。また、非明示的なサインが多いので、表現形から対話者間の理解の程度を確認することは簡単ではない。

この項目は相づちといわれるものと重なるところが多い。肯定的、積極的なものから否定的、消極的なものまでさまざまな様相があるが、これは発話する音声の調子によって微妙に違うので、表記された文字から判断することは難しい。

## 7.2 情報要求

### 7.2.1 新情報の要求

例2の(K.S137) (K.S139)は明示的な疑問の提示と新情報要求の例である。日本語で終助詞「か」はこの疑問を示す代表的なマーカーである。

### 7.2.2 確認要求

日本語では終助詞の「だよね。」などがこの確認の明示的な表現機能を果たしている。例例1では

(N3)「あるね。」(N13)「なるんだよね。」などである。一方(N7) (N9)「～ということ」のようにイントネーションで、問いかけになっているようなやや非明示的な表現も多用される。例1の(N11)の「それはないんじゃない」というのはイントネーションが上昇していて、確認要求にも見えるが、これは発話者の意見提示とも考えられる。その境目を決めるのは難しい。

### 7.2.3 理解チェック

セミナーでは教官が学生の理解があやしいと思うとたびたび用いて、その理解を確認する方略である。

## 7.3 情報提供

この項目は相手から求められた質問に応える発話と自らの態度や意見を表明するもの、対話者に行方を指示するものまでさまざまある。

セミナーでは前の説明や意見などの発話について疑問を提示され、それに対して応答してさらに説明を加えるとう過程が多い。説明は単なる事実の叙述から発話者の思考内容の表明へと様々な段階があり、明示的なマーカーを見ることもできる。「～なんですよ。」は説明の代表的なマーカーとなる。この説明がさらに発話者の自信の強さや相手との強弱関係で説得や主張に進むことがある。例1の(S.P8)「そう考えてます。」(S.P10)「～が私の意見です。」などは明示的な意見表明の例である。ほかに「べきだ」「はずだ」などもある。

例2(R.M142)の「ふと考えたんだ」などのように心的態度や状態を表明する例はあまり多くはないがときどき見られる。また未来への予告や態度などの宣言文のようなものもある。「検討します」「これから考えてみます」などの例が資料中では見られた。

## 8 まとめ

—有効なコミュニケーションのための対話の方略

本稿ではセミナーにみられる理解過程を分析するに当たり、ディスコースの流れの中に起こる現象を分析した。その結果得た知見をまとめると次のよ

うになる。

1. 人は物理的・音声的な聞き取りが出来ない場合でも、知識背景で推論をして相手の発話を理解しているが、専門的な知識背景がないと推論が利かず発話理解に障害が多くなる。
2. コミュニケーションの有効性を計る尺度 セミナー発表では発話の構成を明確にするディスコースマーカーが相手の理解をスムーズにし、発話技術として重要である。分析によってこれには明示的なものと非明示的なものがあることが分かった。これには理解のあいづちを対話者が示せるような発話の進行を行ったり、トピックから次のトピックへの移行を円滑に行える方略がある。またさらには、相手を不快にさせないために、相手を尊重しつつ、要求されている言語行為に的確に応答することもある。

なおセミナー中に対話者の注意を引き付けたり、共通理解の基盤を築いたり、或いは、対話者と友好的な関係を維持するのに役立つ様々なディスコースマーカーを使用することもあるこれらは、発話内容の伝達に有効に機能している。

3. Halliday らのディスコース分析の方法として結束作用 (coherence) を完成させるものとして〈付加 (additive)・反意 (adversative)・原因理由 (causal)・時間推移 (temporal)・例示・要約〉の項目はディスコースマーカーとして有効である。
4. 今後の課題として、さらに詳細な発話機能の分類をする。それによってセミナー対話の成功不成功の評価が出来るようなシステムを考える。

#### 参考文献

- [1] 国立国語研究所 (1994) 『日本語教育映像教材中級編関連教材伝えあうことば4』機能一覧
- [2] 中田智子 (1991) 発話分析の観点 - 多角的な特徴記述のために 『国立国語研究所報告 103』秀英出版

- [3] 仁科喜久子 (1993) セミナーでの対話にみられるパラフレーズ文部省科学研究費補助金重点領域研究『音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究 研究成果報告書』
- [4] 仁科喜久子・笹川洋子・土井みつる・五味政信 (1994) 「理工系留学生のセミナーでの対話理解過程の分析—理工系学生のシラバス作成に向けて—」 『日本語教育』 84号日本語教育学会
- [5] 仁科喜久子 (1994) 文部省科学研究費補助金一般研究 (C) 科学技術日本語講義・セミナーの音声ディスコース分析のための基礎的研究中間報告書『セミナー対話資料集』
- [6] 仁科喜久子・笹川洋子・土井みつる (1995) 「セミナーでの対話における理解過程の分析」 『文部省科学研究費重点領域 対話音声平成6年度研究成果報告書』

#### 今年度の主要成果

1. 仁科喜久子 (1995) 『理工系専門分野別日本語オンラインシステム日本電子化辞書評価研究報告書』
2. 声データベース「東京工業大学留学生の自由発話対話」文部省科学研究費重点領域対話音声データベース登録

# 付録

表1 聞き違いの例

例1

(原)S.P95: これは \* もしこの 先端 を入れなければ \* ならないでしょということです

(新)S.P93: これは 入力、入力パターンによって違います。

もしこの ロックされたセンターのもの を入れなければ0にならないでしょということです

例2

(原)S.P 99: それは実際に \* みな \* するときの話で、これは

(新)S.P 97: それは、それは実際に インプリメンテーションするときの話で、これは

(原)S.P100: \* する度に 必要な条件の それまで

(新)S.P 98: インプリメンテーションする ときに必要な条件の、必要になって、それまで フルロックという番号をここでつけるとちよつと変じゃないかなーて。

例3

(原)S.P111: でもこれは、さっきもでてこのような、このような 特権が必要ということです。

(新)S.P109: でもこれは、サーキットモデルで、このような サーキットモデルではこのよう

(原)S.P111: さっきモデルをこのようなモデルを \* 考えない \* は、このような モデルは必要ないかもしれない

(新)S.P109: もし、サーキットモデルを、このような サーキットモデルを考えない場合は、このようなものは必要ないかもしれないです。

例4

(原)M.K 102: トークン二つと \* 使って 一つの \* 作っていますから

(新)M.K100: その ネットワーク 2つと シー素子を使ってその1つの信号を作っていますから、

対話のスロット発話者 ・発話番号	発信・受信表示	マーカー	情報要求	マーカー	情報提供	マーカー
[	]	(	)	[	]	(
+	ある		説明要求		どういう意味	説明(事柄、理由、状況)
-	ない		疑問提示	~か	意見表明	と思う
	発信表示	あの一	応答要求	~どうですか	意見表示	
	受信表示	はい	確認要求	~ね	主張	~よ

例1 (資料17)

N 教 1: えーと セミモデュラリティ (semi-modularity) と パシスタンシ (persistency) というのは、俗に言う、似ているってもんで、僕自身は厳密に区別は出来ないんだけど。

S.P 2: はい。

N 教 3: それはいいとして、その、セミモデュラリティ (semi-modularity) をなくすという意味には、エス・ティー・ジー (STG) のレベルで、そのセミモデュラリティ (semi-modularity) のような形があるね。

S.P 4: はい。

N 教 5: まえに、(不明)。

S.P 6: はい、はい。

N 教 7: ああいう、あれがなくなってもいいこと。

S.P 8: わたしそう考えてます。

N 教 9: 無くなっても、インプリメンテーション (implementation) のレベルで ハザード・フリー (hazard free) な回路でできるということ。

S.P 10: ええ、そのような インプリメンテーション (implementation) 方法があるらしいという事が私の考えです。いままでの方法は。

N 教 11: それはないんじゃない。

S.P 12: あ、全ては出来ないんですが。

これを無くしても、どのくらいレベルでできるかははっきりいえませんが、できます。シングルサイクル (single-cycle) ・レベルでは、いまそういうなのものを、いまかいてるんです。

N 教 13: それは結果的にその下のレベルで、また新しいエス・ティー・ジー (STG)、変数を増やしたエス・ティー・ジー (STG) を作っていることになるんだよね。

S.P 14: あ、違います。

コンプリート・ステート・コーディング・プロパティ (complete state coding property) を満たすと変数を付けなくても大丈夫ということ。

たとえば、今例を書きます。

で、いまここまでエス・ティー・ジー (STG) で直接やる方法を考えてる人はないと思います。

#### 対話機能スロット

発話番号 / 発信・

受信表示	マ-カ-	情報要求	マ-カ-	情報提供	マ-カ-		
[	]	(	)	[	]	(	)

N 教 1: + 発信表示 + え-と、  
+ 意見表明 + 僕自身は~でき  
ないけれどもね。

S.P2: + 受信表示 + はい

N 教 3: + 確認要求 + あるね。

S.P4: + 肯定表示 + はい

N 教 5: + 確認応答

S.P6: + 受信表示 + はいはい

N 教 7: + 確認要求 + なくってもいいこと。

S.P8: - 受信表示 + 主張

N 教 9: + 確認要求 + できるっていうこと。

S.P10: + 肯定表示 + ええ + 主張 + ~ということが私の考えです。

N 教 11: + 疑問提示 + それはないんじゃない (相手の主張に対する反論)

S.P12: - 否定応答 + あ (相手への反論に対する遠慮がちな否定) + 質問に対する応答 (反論主張)  
+ 理由説明 ~ので。  
<全部ではないが>できま

N 教 13: + 確認要求 + ~なるんだよね。

S.P14: - 否定応答 + あ (相手への反論に対する遠慮がちな否定) + 意見表明

#### 例 2 資料 18

K.S 137: もう一ついいですか。

R.M 138: はい。

K.S 139: スタートトークンというのとスターターノードというもの。(不明)パイプラインを(不明)出発するところが問題だとおもうんですけど。

僕がひとつ聞きたいのは出発したらどこで終わるんですか。

R.M 140: 永遠にグルグル回るといこと。

ぐるぐるまわってそのままほったらかすとくという。

#### 対話機能スロット

発話番号 / 発信・

受信表示	マ-カ-	情報要求	マ-カ-	情報提供	マ-カ-		
[	]	(	)	[	]	(	)

K.S 137: + 発信表示 + もう一ついいですか。

R.M 138: + 受信表示 + はい。

K.S 139: + 疑問提示・応答要求  
+ ~が問題だとおもうんですけど。  
僕がひとつ聞きたいのは出発したら  
どこで終わるんですか。

R.M 140: + 応答・説明 + ~といこと。  
~という。